

安原貞室著 「かたこと」をよむ(中)

— 音韻に関する面についての二、三の管見 —

白 木 進

目 次

- 一、四つ仮名
- 二、連声しやう
- 三、声こゑ(アクセント)

一、四つ仮名

じぢ ずづ の四濁音がなを四つ仮名と称するのは、享保12年(一七二七)刊、三浦庚妥著の音曲玉淵集に、
 じぢずづ 此濁音を四つ仮名といふ。(仁之巻)
 とあるのが初見だという。

四つ仮名混同の歴史をかえりみると、元来「じず」は摩擦音であり、「ぢづ」は破裂音ではっきり区別が存したのに、室町中期から「ぢづ」が破裂音化して混同がはじまり、徳川中期元禄頃にはほぼ全国に普及したが、しかし今日もなお一部地方(四国の高知、九州の南部諸県)に方言として区別をのこす音変化現象である。

今、かたことを中心に、その前後各50年にでた文献を照合すると(1)の50年刊のロドリゲス日本大文典(土井訳本607—8ペ)にいう、

安原貞室著「かたこと」をよむ(中) — 音韻に関する面についての二、三の管見 —

都の言葉遣が最もすぐれてゐて言葉も発音法もそれを真似るべきであるけれども、都の人々も、ある種の音節を発音するのに少しの欠点を持つてゐることは免れない。

○ji(ジ)の代りにgi(ヂ)と発音し、又反対にgi(ヂ)と言ふべきところをji(ジ)といふのが普通である。……

○又zu(ズ)の音節の代りにdzu(ヅ)を発音し、又反対にdzu(ヅ)の代りにzu(ズ)といふ。……立派に発音する人もいくらかあるであらうが一般にはこの通りである。

と、都もすでに四つ仮名の混同が一般化していたことを指摘する。

(1)かたこと(1)の50年刊)から四つ仮名の混用をひろいだして表示すると、
(印は、正音として提出した上の語は正で、下にだしたかたことの方が誤である例)

(1) じ↓(ぢ) 7例

2, 如在ちよきい

○146、連習れんじゆを れんぢやう

○150、不自由ふじゆうを ふぢうは わろし

187、つちかぜ 颯

- 218、純じゆんぢやくを じゆんづく
- 222、術じゆつなきを づつなき
- 450、助じよらう老を ぢよろ
- (2) ち↓(じ) 18例
- 11、直しじきんに 65直伝
- 57、じやうにといへるは 重ぢゆう疊の心にて
- 60、おじやれもよしと云り
- 65、姉こうじ小路 598、富こうじ小路 とびのこうじ……
- 押おし小路を うしこうじ……
- 87、行ぎやうぢやく住坐卧を じやうぢやくわ
- 89、常じやうぢやく住を じやうぢやく
- 186、天てんぢやく竺を てんぢやく
- 292、おおやじ おおやぢい
- 322、孫まごぢやく嫡子しを まごぢやくし
- 330、御ごぞんじのごとく
- 361、頭づつきん巾ぎんを づつきん
- 382、軸じやくといふを じやくは如何
- 527、紫むらさき陽やう草そうを あんじさい
- (3) ず↓(つ) 0例
- (4) し↓(ず) 1例
- 633、厨ぢしゆ子しといふべきを ずすは如何

291、おやじやもの てゝじやもの はゝじやもの 親じや人

293、めじやもの

303、病じやもの びやうじやにん

がある。かたことより一足さきに、1628年刊行の安樂庵策伝作醒睡笑に「親ぢや人」の語あり(巻二の14話に1例、同15話に2例、巻七の10話に1例)。策伝は であるしぢや と解している。しかしかたことの場合は醒睡笑よりも用例がひろく、著者はじや||者とみて、したがって「じやもの」は重言と解している。右の一連の「じや」は、四つ仮名混用の例にいれないことにした。

四つ仮名の混同は、京言葉でもすでに一般化しているとロドリゲスはいつているのに、その50年後に刊行のかたことに、前記表示のように混用例が意外に少数なのはなぜか。

かたことには 11、直じきに 47、正直ちぢき また 87、行じやう住ぢやく 89、常ぢやく住ぢやく など同一の字に混用の例あり、貞室は四つ仮名混同の問題には気づかず、したがってそのかきわけにも注意しなかったのではないか。現実の発音上では混同していたにかかわらず、表記の面では従来の慣習が筆にあらわれ、おおくはおのずとかきわけられて、混用例は少数となつたのであろう。

(イ)かたことから約50年の後、元禄8年(1695)に、四つ仮名をとりあげた書がふたつ刊行された。倭字正濫抄と蜆縮涼鼓集とである。

a、倭字正濫抄は契沖の著、元禄6年の序があり、五巻。巻五の末尾に 中下に濁るち(46語) 中下に濁るし(56語) 中下に濁るつ

一(94語) 中下に濁るす(32語) を列挙し、

右ちよりこなたの四もし、都方の人の常にいふは、ちの濁りはじとなり。つはずとなる。田舎の人のいふは、じはぢとなり、ずはづとなる。ちとづとはあたりて鼻に入るやうにいはずればかなはず。都方の人は、心を着つれば、いづれもわけてよくいはる。田舎の人は、知てもおほく改たむる事あたはず。但ちとつとの濁りよくかなへむとすればなだらかならでわろく聞ゆるなり。心得べし。

と説明をくわえている。

b、仮名文字使蜷縮涼鼓集は、元禄8年2月の序、翌3月の開版。

序末に鴨東教父、書子寶鏡堂之西軒。とあるが、その何人かは不明。

本書は外題にすつ文字使と角書せるにもあきらかなごとく、仮名遣

の中、じちづつ四濁音の区別をとりあげ、都の言葉を中心に用例千六百余語を列挙したもの。書名もしづみ ちづみ すづみ つづみと類似せる四語をつづりあわせ、名づけている。凡例にいう、

京都、中国、坂東、北国等の人に逢て其音韻を聞に、総て四音の分弁なきがごとし。唯筑紫方の辞ことばを聞に、大形明に言分る也。一文不通の兒女子なりといへ共、……其音韻を混乱する事なし。……

誠に端はなは箸橋などとして音声の高低自由なる都人の、此四つの音ばかりを言得ざらん事は、最口惜き事也。豈いか習ま学ませまざるべけんやとある。

契沖は仮名遣の一環としてとりあげ、鴨東の教父は慷慨をこめて混同の是正にとりくんだが、元禄の世は俳諧にも小説にも、四つ仮名は西地域の一部をのぞいて、すでに区別をうしなっていた。

安原貞室著「かたこと」をよむ(中) 一音韻に関する面についての二、三の管見一

二、連 声

連声は平安末期にはじまり、鎌倉・室町にひろがり、戦記物や謡曲などに多出する音韻現象で、徳川期には収縮し、現在では観音かんのん三位など数すくない特定語彙に、又九州などに本のよむ のごとく方言語法として一部残存しているにすぎない。ところでかたことには、連声をよしとし称揚する場面がいくつがある。左に列挙する。

連声の原則

(1) 拗音(nm)の次にくる

ア行音は ↓マ行音へ
↓ナ行音へ

ハ行音は ↓バ行音へ

ヤ行音は ↓ナ行拗音へ

ワ行音は ↓ナ行音へ

助詞 を ↓の

は「わ」↓な

かたことにみる例

- | | |
|-----|--|
| 342 | 春屋 <small>しゆんおく</small> 国師を しゆん <small>のく</small> のく
といふべきを。 しゆんろく
といふはわるし |
| 87 | 巖沛 <small>いんばい</small> |
| 137 | 偏頗 <small>へんぱん</small> 147、連判 <small>れんぱん</small> 757、三 <small>さん</small> 百 <small>ひゃく</small> |
| 28 | 文屋 <small>ぶんや</small> 康秀をふんにやなど、
いふは、連声とてよきこと
ばなり |
| 67 | けんよ <small>(権輿)</small> なれども連
声にてけんによとよむがよ
し |
| 622 | 泉涌寺 <small>せんゆじ</small> 。 せんにようじ |
| 28 | 仁王経 <small>にんのうきやう</small> を。にん <small>なう</small> ぎやう
とよみ本院をほんにん。 … |

(2) 入声 (t) の次にくる

ア行音は ↓ t 促音 + タ行 音 |
ヤ行音は ↓ t 促音 + タ行 拗音 |
ワ行音は ↓ t 促音 + タ行 音 |

助詞

を ↓ ↓ と
は (わ) ↓ た

無声子音ハ行は ↓ t 促音 + パ

(ク) カ行サ行タ行は ↓ 促音)

(3) 入声 (k) の次にくる

カ行音は |
ハ行音は |
k 促音 |
パ行音は |
へ

右の(3)は、橋本一國語音韻史には第三として並列され(97ペ)同文
学大辞典「連声」の項では、異説、広義の場合として、やや別あつ
かいでかかれてゐる。

(4) その他かたことにみる連声の例

(イ) 248、293、善ぜん、悪あく

330、345、新発意 シンボツイ
| シンボツイー シンボツイ
402 響をもつとい 442、節用集
637、雪隠 又 雪陣と云歟

166 一 瓶 755、756、八百
779 百ばい

21、悉皆 (k) 12、仏祖 (s)
245、合点 (t) | この種は 64 例あ
る

452、続飯そくいひを。そつくひ……

290、悪あく、口こう 69、800 北ほく 国こく
757、北ほく 絹けん 400、竹たけ 籠かご

備考

連声なのに「ぜんなく」とはせ
ず。

(ロ) 282、御ぎよしん 寝あれを ぎよう
しなれ。ぎよしなれなど、
いふはいかゞ
(ハ) 607、韻くほん 音いん 堂だうを くほん
のど

(5) かたことにおける連声の破格例

(イ) 142、鍛練たんれんを。たんでん 但
連声歟

(ロ) 674、人の名の……又権六。

善六などは。ぜんのく。ご
んのくといふがよし連声な
ればなり。

ぎよしんあれ ↓ ぎよしんあれ ↓
ぎよしなれ となる筈だが、著
者はよしとみとめず。
著者は「くほんのん」を認めて
いない。

著者も疑問視したごとく、之は
連声ではない。

之も連声というのは無理であろ
う。但し醒睡笑三にも「新六 ↓
新のく」の例あり。当時は連声
とみとめられ、連声あつかいを
したのであろうか。

右の表示でもあきらかなように、かたことにてる連声の例は、著
者が称揚し、強調するにもかかわらず、けつしておおくはない。
(2) や (3) にみる、入声 (t) や (k) が、単に促音化するだけの語 (之は今
日でも多数) をのぞけば、のこるのはほんの少数となる。特に連声
が助詞におよぶ例にいたっては、日葡辞書には二例 (臣は ↓ 臣ナ
今年は ↓ 今年ナ)、醒睡笑には一例 (巻五 煎茶瓶の持て) あるが
かたことにはみあたらない。時代はくだるが三馬の浮世床に、
お山さん「……あいうえおの上へ、むの字が乗れば、五音相通で、
恩おん 愛あい、韻いん 音いん、延えん 引いん、善ぜん、悪あくなどといふものだ……今度おめへ
が江戸詞を笑つたら、一番しめてやらうと思つて待てるたはな」。

(二編 女湯)

とあるのを見ると、徳川期にはいつてからの連声は、京都の方がはやく衰退して、関東の方によりおおく残存していたのであろうか。

三、しやう声こゑ(アクセント)

日本人がアクセントに気づいたのは、漢字を移入し、四声の存する事をした時にはじまる。奈良朝には音博士もおかれたが、漢文中国語にならともかく、性質を異にする日本語には、四声は即ししない。

古事記における上、去の符号(上が31、去が1、計32)は有名であるが、後世はおおく平、上、去の三点で論議された。たとえば倭字正あやかし抄あやかし五最後の段に、四声を論じた後にいう、

和語にも平上去の三声あり。一字仮名にていはく日ひ種むね火ひ…
…二字仮名橋はし端はし箸はし…此類にて心得べし。(巻五)

かたことおよびその時代のアクセント観

(1)ロドリゲスの日本大文典

アクセントなる語をつかつて、日本語のアクセントを論じた最初の書である。いわく、

漢字の「こゑ」に関して、作詩その他の目的からしてこれらのアクセントを委しく取扱つてゐるけれども、日常の話し言葉や談話に至つては、いくらかでもアクセントなり発音法に就いて、日本人の著述の中で觸れたものは全くないのである。

安原貞室著「かたこと」をよむ(中) — 音韻に関する面についての二、三の管見 —

と、言語学的なアクセント論の欠除を指摘し、

然しながら、通用の談話や話し言葉の上で、立派に発音したものを「訛らぬ」といひ、取るべきアクセントを取らないで悪く不正に発音したものを「訛る」……といふ。……

上述のやうに、日本人はその國語にアクセントに就いて論じながら、談話に關したものは説いてゐない。それにも係らず、発音上にはその音訓、又は抑揚、又はアクセントがあり、自然の発音法がある。……その抑揚又はアクセントが、……全國語の中で正しくて自然なのは、五畿内の五ヶ国と越前、若狹、丹波、近江、播磨のとである。(土井訳本621—623頁)

として、以下に諸例をあげ、日本語のアクセントは長・短音節とも三種(平、上昇、下降で、符号は— / \)に區別されると説明する。

右のロドリゲス解説に比して、影はうすいが、國語文献のアクセント論をみよう。

(四)狂言 (傍点は筆者)

「末広がり」の太郎冠者・すっぱの掛合で、
すっぱ「……さて戯あそび 絵、イヤ、これはちと仮名が違ちがうておりや
る」。

太郎「何と違ちがひました」。

すっぱ「何方へ進すすまなされうとあつても、この柄えらで戯あそれて遣やはせらるるによつての戯あそれ柄えら、かまへて絵えのことではおりない」。(小学館「日本古典文学全集35、狂言集73—74頁」)
右の部が岩波文庫本では左のようになる。

売手「ざれ絵と云はそ。な。た。の。お。し。や。り。様。が。あ。し。い。何。方。へ。進。上。物。に。被。成。る。と。有。て。も、此。柄。で。ざ。れ。て。被。遣。る。に。依。て。の。ざ。れ。柄。か。ま。へ。て。画。の。事。で。は。お。り。な。い。ぞ」。

「仮名が違う」といい、「そなたのおしやり様があししい」とは、今なら「アクセントが違う」という所だろう。又、柄であつて、絵（画）ではない。というのは、一音節語の柄と絵が、当時京都ではアクセントでいいわかれていたのである。

いかたことは各条とも特に音声を重視するが、直接アクセントにふれるとおもわれるのは左の四条である。

65、……たとひかうやうの書物にするせりととも。口づから伝受せざる人の用侍るにたらず。すこしの清濁にて雲泥の違ひ侍ること也。縦へば撰政といふべきを殺生といふ声にいへば。物の命をたつことになる也。……清濁墨譜を付たる本をみたりとも。猥に知がほにしていふことなかれとこそ。

85、危きことを。あぶなしはよしと云り。浮雲とも書とかや。定家卿天福の伊勢物語にも。あぶなくと云声をさくられたり。

236、真言禪家などの名目は今もむかしの音声をうしなはぬよし云伝へたり。殊勝なる事也

347、同朋を。堂坊とはいはず

65、条にいう声とは、（普通は字音のことをさすが）音声、アクセント的な意味をもつことは先のロドリゲス文中にもみえ、国文にも徒然草の四段、平語七実盛最期などにある。

この条は、同音の撰政と殺生とが、アクセントによつていいわけ

られるというもの。

この二語は、今日東京語では撰政、殺生と区別があるが、京阪語では撰政、殺生と差がない。筆者は京都で何人かの発音もきいたが、現在は区別がみとめられない。かたこと時代の京都ではどう発音したのかを金田一春彦氏におたずねした所、平語などの資料からおして、撰政、殺生であつたとご教示いただいた。

なお右の条にある清濁墨譜の語について、清濁は開合清濁ともいい清音に濁点をつけると音声が変わることから発音全般をさし、墨譜とは墨でつけた発音符号である。ロドリゲスの大文典にも次の用例がみえる。

都及び小数の国々……を除いて、日本の国々の大部分においては開合清濁即ちアクセントや発音がよろしくなくて、すべてそれれの国で勝手に訛つて正しくない発音をしている。（土井訳本607ペ）

347、同朋を。堂坊とはいはず
この条は、同音の漢語ながら、開合がちがい、そしてアクセントの異なるを指摘したのであろう。

(二) 蜷縮涼鼓集の著者は、音韻に通じ、扶桑切韻(保合)をかけた程の人だが、アクセントに関しては、涼鼓集の凡例に、
誠に端箸橋などとして音声の高低自由なる都人の……
とゴマ点をつかつての説明が、一カ所ある程度。

(三) 倭字正濫抄の四声論、和語三声論については簡単なが既に先にふれた。